

主イエス・キリストよ、おいでください

— 聖餐式の祈りを味わう —

北陸伝道区霊交会 2025/07/20 福井聖三一教会

司祭 ヨハネ 井田 泉

1. はじめに

- ・わたしたちの信仰生活にとって、礼拝ことに聖餐式はどういう意味を持っているだろうか？ 信仰と生活の力の源泉か、習慣か？
- ・今回は、聖餐式の中からいくつかの祈りに注目し、それを深め味わってみたい。聖餐式全体については、別冊「聖餐式の言葉から」を参照してほしい。
- ・聖餐式の個人的な経験から
金沢聖ヨハネ教会にて（1979 年夏） 聖餐による力づけ
司祭按手（1979 年） 自分が司式することから与えられた驚き（神の臨在）
- ・わたしにとっての司祭職（教会・幼稚園・大学・神学校、退職後を含め計 46 年近くすべての働き）の中心は聖餐式の司式・説教

2. 祈願

(1) 主イエス・キリストよ、おいでください（参入）

- ・現行聖餐式の本文は、司祭がこの祈りをすることから始まる。
イエス・キリストが来てくださらなければ（主の臨在がなければ）、礼拝は無意味。
主イエス・キリストと出会い、この方と交わる（この方に呼びかけ自分を差し出し、またこの方から語りかけられ、その命をいただく）ことが礼拝の意味であり目的。
- ・これは新約聖書に出てくる重要な言葉でもある。
「マラナ・タ（主よ、来てください）」コリント I 16:22（パウロの祈り）
「アーメン、主イエスよ、来てください」ヨハネの黙示録 22:20（聖書全体の締めくくり）
- ・ただし、わたしたちがイエスを呼ぶだけではない。実は主イエスが先に食卓の準備をして、わたしたちを招いていてくださる。この両方が大切。

(2) キリエ・エレイソン（主よ、憐れみをお与えください）

キュリエ エレエーソン

κύριε, ἐλέησον

- ・新約聖書は、当時の地中海世界共通語であるギリシア語で書かれた。新約聖書に含まれるギリシア語の祈り求めの言葉が、わたしたちの聖餐式にまで継承されてきた。

「^{キリエ}主よ、^{エレイソン}息子を憐れんでください」

イエスにこう訴えたのは、発作の病に苦しむ息子をかかえた父親だった（マタイ 17:15）。またエリコの盲人バルティマイは、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び求めた。イエスは立ち止まり、彼を呼ばれた。彼は見えるようにされてイエスに従った。（マルコ10:46-52）。

「イエスは、群衆が飼ひ主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」マタイ9:36

- ・聖餐式の中で、わたしたちも自分の困難や願い、人の困難や願いを携えて、**キリエ・エレイソン**（主よ、憐れみをお与えください）と主に切に祈り求めよう。

（現在進行中の祈祷書改正案では「憐れみ」を「いつくしみ」に変えようとしている。人間と世界の悲惨の現実からの切実な祈り求めを薄めてしまわないか。）

3. 賛美

- ・わたしたちの祈りに「賛美」がどの程度あるだろうか。神の愛と救いの業に触れて賛美が起こる。また賛美の回復は、神の業の再発見をもたらす。
- ・詩編 150 編では、全 6 節の中に 13 回「ハレル（ヤ）」^{הַלְלֵי יְהוָה}（主を〔神を〕賛美せよ）が繰り返される。神への賛美は非常に大切にされてきた。

(1) 大栄光の歌

「いと高きところには神に栄光、地にはみ心にかなう人びとに平和がありますように。……主の栄光をほめたたえます。……最も高くおられます アーメン」

- ・ベツレヘムの羊飼いたちが聞いた天使の賛美の合唱にわたしたちも加わる。わたしたちは狭い自分の世界から抜け出て、天使たちと一緒に神を賛美する。
- ・大栄光の歌の後半は焦点が「イエス・キリスト」に移り、この方への祈願と賛美で閉じられる。
- ・天使の合唱を聞いた羊飼いたちが、急いで幼子を探しに出かけたように、わたしたちも救い主を求め、その方との生きた出会いに近づいていく。

(2) ニケヤ信経

- ・キリスト教信仰のエッセンス。わたしたちはこれを信じて生きている。
- ・神に対してわたしたちの信仰を告白する。

- ・神の救いの業を一つひとつ確認し賛美する。一句一句の中に神の救いの業が凝縮している。心をこめて丁寧に唱えれば、神の愛に具体的に触れて喜びと感動が与えられる。

4. 懺悔（罪の告白）

- ・わたしたちは個人的な、あるいは共同的な大小の過ちによって、自分の中に負い目を抱え、神との間に壁を作ってしまう。
- ・わたし（たち）の罪、過ち、葛藤、嘆きを神の前にさらけ出す（懺悔・告白）ことは、「心を見られる」（サムエル記上 16:7）神との間の関係を回復すること。
- ・わたしたちの懺悔が真心からのものであって、司祭の執り成しの祈りとともに聖霊が働くなら、そこに神の赦しが現実にかかる。神の赦しの愛がわたしたちを清め、命を吹き込み、わたしたちは新しくされる。

5. 感謝

- ・「感謝」という言葉は聖餐式文の中で「大栄光の歌」「福音書」朗読後、「感謝聖別」に出てくる。特に主イエスが最後の食卓において「パンを取り、感謝してこれを裂」かれたこと、「杯を取り、感謝して」罪の赦しを得させるための契約の血について語り、聖餐を制定してくださったことを大切に記憶したい。
- ・わたしたちの感謝は聖餐を受けたことによって絶頂に達する。
「この聖餐にあずかった者を、み子イエス・キリストの尊い体と血をもって、養ってくださることを感謝します。」
- ・この感謝を心からささげるために、陪餐とその後の沈黙の時間を大切にしたい。主イエスの愛の命は、わたしの心と体のすみずみにまで浸透することを感じたい。また会衆（祈りの群れ）全体にも、その愛の命は浸透する。

6. 黙想・沈黙・静けさ silence ——礼拝全体におけるその大切さ

「静けさ（沈黙）は、典礼礼拝において不可欠な要素です。なぜなら、それは私たちに、思い巡らし、祈り、個人的な嘆願や賛美をささげる機会を与えてくれるからであり、何よりも神の御前にいるための時間だからです。静けさは決して、時間の無駄や、礼拝に余分に加えられたものと見なされるべきではありません。静けさは典礼のさまざまな段階を区切るものであり、上記のような目的のための時間を提供します。」

Dennis G. Michno, *A Priest's Handbook: The Ceremonies of the Church*, 1998

（著者はアメリカ聖公会の司祭）

- ・具体的には例えば——礼拝の前／特祷の前（「祈りましょう」の後）／聖書朗読の後／懺悔の前／代祷の後／感謝聖別の後・主の祈りの前／陪餐後の感謝の前

- ・礼拝の開始前にその場が祈りの空気になっているかどうかは、その礼拝の質を大きく左右する。

「主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」ハバクク 2:20

- ・礼拝全体を言葉と声で埋め尽くすのではなく、神（聖霊）が働かれる余地を空ける。たとえ数秒でも沈黙の静けさは大きな意味を持つ。

7. 聖霊

- ・礼拝が神を経験する生きた出来事となるか、それとも形だけの儀式になるかは、神ご自身の臨在と働きにかかっている。臨在し働かれる神を聖書は「**聖霊**」と呼ぶ。

- ・聖餐式文に「聖霊」がどのように出てくるかを確かめてみよう。

(1) 「どうか**聖霊によってわたしたちの心を清め**」（清めの祈り）

聖霊こそがわたしたちの心を清め、主を心から愛させてくださる。

(2) 「主は……**聖霊によっておとめマリヤから肉体を受け**」ニケヤ信経

救い主の降誕は聖霊なくしてはあり得なかった。

(3) 「また、主なる**聖霊を信じます。聖霊は命の与え主**」ニケヤ信経

聖霊は礼拝に命と喜びを与え、わたしたちの信仰と生活を力づけ導く。

(4) 「あなたの賜物であるこのパンとぶどう酒の上に**聖霊を送り**、これをわたしたちのためにみ子イエス・キリストの体と血にしてください。」感謝聖別Ⅱ

人間の営みの実りであるパンとぶどう酒がイエス・キリストの体と血となってわたしたちを生かすのは、聖霊の働きによる。司式者が魔法を使うわけではない。

(5) 「どうか、**聖霊によってわたしたちをこの世に遣わし、み旨を行う者とならせてください。**」

聖霊によってこそ、わたしたちはこの世において神のみ旨を行うようにされる。

- ・教会を誕生させたのは聖霊降臨。主イエスの約束を信じて聖霊を待ち望んでいた祈りの群れに聖霊が激しく注がれた（使徒言行録 2:1-4）。
- ・聖霊について聖書から深く学び、聖霊を祈り求め、経験していこう。

8. おわりに——生きた喜びのある礼拝のために

- (1) 備えを大切に
- (2) テンポと間 心をこめて祈れるように
- (3) 心と声を合わせる（一緒に祈る）
- (4) 「呼びかけと応答」から生まれる力と一体感
- (5) 聖霊の臨在